

喊声はソラに響き山々に衍する。暫くこの状況が続くと兎を追う先生も生徒も疲れ果て、地べたに座り込んでしまふ。殴り倒した兎の耳を持って引きずりながら登ってくる先生もいます。捕獲成果は二匹か三匹、あとの五、六匹ほどは輪を潜り抜けたか藪コの中に潜り込んだりで兎の姿はもう見られません。

収穫の兎は高等小学校二年の生徒は長い棒の中央に四本足の縛られた兎を吊るした棒を先と後を担って校舎に運び込む。その後の兎は先生方のお酒のおかずとなります。学校の小使さんと先生が兎を料理するのを生徒達は横目で見ながら俺ラどば早くモドス「学校早退させる」てこれから一ぱい呑むだ、先生は狡いナートコソコソ言いながら家路を行く。

肉食の乏しい時代である。観音様からしばらく行くと小高い坂道がある左端コにジジ井戸コとババ井戸コが並んでいる井戸コと言われましたが窪地に少し水の溜ったような所でありました井戸コの周囲が砂地のためか水が冷たく常に澄んである。

大雨が降ると昔しからババ井戸コだけが流されて消えるが何時となく又現れて二つ仲睦く水を給してくれた。此の井戸コのある場所は嘉瀬山一番の絶景である。

江南春 杜牧
千里鶯啼綠映紅
水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺
多少樓台煙雨中

上の中国漢詩の挿絵は長瀬山からの望みと酷似している本が私にあったのでかたりべに掲載すると思つて本架を探したが見当りません又の機会に致します
区有地当時に馬の飼料の乾草にする草刈

搬することである。弟と二人で小田川山入口にくると人々が歩いて道はすっかりと踏み固まつている。もう心配はありません。日本晴れにめぐまれ仕事は早く済みあとは薪棚を縄でゆわえたり、名を書き印するだけである、私はあと片付をして頂上の林道を通つて帰るから先に帰つてもよいと弟を先に帰す。

秋の新切りには、朝は森林軌道線を登り、天気の良い日の帰りは頂上に登り飯詰山と滝ノ沢間の林道を帰るのが、たびたび、でありました。

滝ノ沢と飯詰山の高く聳え立つ樹木の間を夕映えが入り込み、落葉の地面を映ちる静かな秋の暮れは足音と落葉のサクサクと少しくぐく音だけである。キリゲ山を過ぎ嘉瀬山の民有地に入ると一面に夕映えが広がる、村区有地を個々の人が分かつて少しの年月しか経っていないため、まだ若木の低木ばかりであった。

ジジ井戸コとババ井戸コの周囲からは遙かに、権現崎、夕日の沈む岩木山の絶景が望まれたが、現在はその絶景を観音様からの一部と第二スキー場「駐車場」からの岩木山等部分の眺めにとどまっています。

この日は日本晴れである、秋の夕映えを思い出して夕日の冬景色を眺めたさに上の林道を目ざし登り始める。しかし、昨夜の降り積った雪の深さをケンズキの履いてない足では疲れるばかりであった。

林道に登れば大丈夫と頑張っていたが林道にようやく到着し

り場で私は兄と草刈に行った思い出もある。

北は権現崎、南は夕映の岩木山を望まれる、柚人や山菜取りの往来にはジジ井戸コババ井戸コの水を呑み妻々谷間を眺み一休みの所である。

なお近くに鉄ナベ、ヤカン類、の錆落しに最上の磨き砂が有り村人もよく使用された砂である、私も砂を取ってきては西郡の親戚に分け与え喜ばれました。区有地のこの山は個人別に分け持つ様になり当時の植えた苗木も現在は立派な柚木に育ち、林道も整備されジジ井戸コババ井戸コも最上の砂コも絶景も六十余年の歳月の流れは昔しの面影はなく樹木だけは悠々と聳えています。

私達若き頃、力試しに肩に担った大きな高六十センチ一直径八十センチほど餅搗臼、今金一さん宅に有った。嘉瀬観音様近くの山より切り取ったと言ひ伝えあった。又一世紀も経過すると今日の柚木も倒され、若き日に眺めた嘉瀬山のように変望するだろうが。

第二章

昨夜は多く雪が降り積った様子である。今日、山仕事ができるか心配であります。朝起ると早速戸外にでて見た、長靴が潜る深さである。しかし、山はもつと多く積っている筈である。朝日が昇り輝き始めた。今日は日本晴れだ山に行く事に決める。仕事は小田川沿えの滝ノ沢の薪を人掻りて森林軌道線まで運

たがそこには全く人の歩いた足跡はありません。

さア大変である、進むも去るも深い雪敷である。下つてよいやらこのまま進むのがよいか迷った。しかし、弟に上の林道を帰ることを告げている。もし、途中行き倒れになつても弟等はこの林道に探しに来ると信じて前に進む、腰まで深い雪道を一キロ余を歩き続けると、中柏木山と飯詰山間の林道の入口より立派な馬橋の道になっていた。

①此にくるまでに空腹と喉の渇きに松葉と雪ぎを度々口に入れては歩いてきました。

一休みして弁当箱の残り肴を食べたが喉の渇きにはどうにもならず、空弁当に雪を詰め、その上に我がショウウベンをかけ雪を溶かして、それを飲む。味は、何にも解りません。唯、一気に呑み終わりました。

しだいに日も暮れてくる幸いにも雪の降らない明るい晩である。無我夢中で歩るく、休むにも腰を降してしまつては立ち上る自信はもうない、少し高い所に仰向になって背を寄り掛けるようにして休む、それも二度、三度、くり返していると眠りが来る。睡魔に襲われると死に至ると人々から聞かされている、そう、

休めない一歩、一歩と歩いた、嘉瀬山の民有地をどれだけ歩いたのだろうか、里の灯りの輝きを見て咄嗟に家族を想い出す。

②四才頃の長女の「現在鎌田左官工業の主婦」の現象はあまりにも強く副射的に私の目の前に現れては遠くなり又現れ何回もくり返す。当時日常の夜は長女を添え寝していました。

ようやく小山内漫遊仙人の住家の観音堂にきた、漫遊仙人の住家に行く坂道を登れる状態ではなく住家に行くのを断念する。観音様の坂道を下りながら近くに木下石雄さん宅のあるのに気付く「先輩の木下俊蔵さんの別家である」木下さん、木下さんと呼びながら入口に行く、私の姿を見た木下夫婦は驚きながら、履物も脱せずそのまま台所に上げストーブの火を強くして座らせようとするが、座ることができませんでした。

リンゴ箱を持ちだして箱に腰を掛けさせてくれる、木下さんは早速先輩の木下俊蔵さんに行く、先輩は私の家に連絡する家では親戚を集めて、捜索相談中であつたとゆう、馬櫓で迎えにきてくれる。

①極限の空腹は私を意外な行動を取らせたのでしよう。それにしても、若き日の役小角（六三七〜七〇一）の霊能者は岩窟に住み葛の衣を着けて松の葉を食らい、呪法修めること三十年と密教の本に記してありましたが、どんな処理法で食べられたのだからか。

私は雪中の林道で自然のままの松葉を幾度、口に入れて咬みましたが喉は通りませんでした。

②民有地の林道で長女の現象に逢つた時刻は家では長女が異常におのき母親に抱き付き離れなかつたそうです。

私の心体が異常を来たす、一時期のテレパス「精神感應」的な存在となつたのだろうか、霊能者の本によれば正式のイタコ、になるには大変な苦勞するといわれます。

徒弟制度

今から、七年程前、私が入院中に同室の当時七五〜六歳位の患者から聞いた話で有る。終戦以前迄は何処の家庭でも皆んな貧しかったので小学校も碌に入らぬ時代だったが、身に職業を着ける為職人の家に拾歳以上になると住み込みで見習と口減しの為年季奉公に出された。

年期奉公と言っても職種は色々あるが普通、農村地帯の周辺では

例を言うと鞍具、左官、鍛冶屋、屋根葺、桶屋、曲し屋、荷車の大工、馬櫓の大工、床屋、大工、その他、色々あるが同室の患者は金木町の某呉服店に年季奉公人として入つたという。

同室の患者は過去を回想し語ってくれたが、呉服屋の場合は丁稚から、小僧、番頭、帳場（経理）が有るが帳場は出納の記帳や其の他をやるが店主が最つとも信用する人を置くという。

十二〜三歳の鼻垂れ小僧が親元から離れて他人の飯を喰うのだから大変な難儀だったと言う。家に居ると親達に甘えている子供が年季奉公に出ると前垂を当て走り回るのだ。又、奉公人の小僧は朝、一番に早く起き店を開け、内と外の掃除をして開

修業一年目、目が見えないのに心眼で物が見えるようになって、神仏の声が聞かれるようになり、訪ねくる人々の顔形、身に付けている衣服まで判読できるようになるという。二年ぐらいのきびしい修業を終え、最後の試験を受けることとなる、これはまる一週間不眠不休で修業を続けるので招神術・招仏術の総仕上げが行われ、その間に九回の水ごりを取り、ムチ打ちを受けるきびしいものであるといわれます。

ましてや山岳修験者、役小角、真言宗密教者弘法大師（七七四〜八三五）の偉人達には普通人には奇跡と思われるような事をなさつたのだろうか、お経の一節もさとれぬ私ではありますが出稼先で買ひ求めた密教の本に空海の意味の深そうな言葉が書かれてあつたのでここに記します。

何処かのお通夜に真言宗の住職さんより説教として聞かされた言葉であります、馬の耳に念佛と言う諺の如く、お通夜の時には何にも感ずる事がありませんでした。

「生まれ生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し。」

（空海『秘蔵宝鑰』）

秋 元 惣之進

店前には帳場や番頭の寝床の布団の整理やら部屋の掃除と店舗以外の仕事もしなければならぬ。

呉服店では店頭には余り商品を置かず、店舗の横に反物を置く戸棚が有り店の後には土蔵があつた。高価な商品を商うには火災、盗難、其の他を防ぐ為土蔵が無くてはならなかつた。

夏には店舗に煙草盆を出して置くが、冬は小さな火鉢に帳場や番頭は手を焙ぐりながら、お客様の接待をする。お客様が色々な品物を注文すると番頭は小僧や丁稚に其の品名を言つて指さして手を叩いて「ホーラ」三太（小僧、丁稚）棚から土蔵から縞の青い反物とあれこれ品名を言つて番頭は小僧や丁稚に言い付ける。

小僧や丁稚は一日中、店の内外を走り目の回る程の多忙さである。一日の店の売り上げが終つて閉店となる頃には心身共に疲れ果て漸やく店が終ると自由の身体になるが、その時は「クタ、クタ」に疲れ、眠い目を擦りながら床に入る。このような毎日が五年も六年も無給金で続くのである。

休日は店から暇を貰えるのは贅入と言つて正月とお盆の二回

だけで、わずかの土産と小遣銭を少し貰って親元に帰る、正月とお盆の歳入がくるのが何よりの楽しみで指折り数えて待つている。

両親も又、可愛い吾が子が歳入に元気で帰ってくるのを首を長くして待ち侘^ヒているのだ。昔の従弟制度は主人や番頭には絶対に服従させられた。

この様に年季奉公は無給で五年も六年も奉公させられた。同室の患者は話の最後に面白い事を聞かせたので記して見る。農家の人々は純朴なので掛引きが楽だという。農家の人達は品物を買う時にきまって「マゲでケヒ」という、呉服屋では其れを知って居るから売り値の上に「マゲル」分を掛けて居るのだという。農家の人々の心を巧みに利用しているのだ。

例えば反物を捧尺で測って売るのが「マゲル」分を延^ヒというが反物を六尺測る時は二〇三寸の延を付けてやるが、知らない農家の人は二〇三寸得をしたと思ひ喜ぶ。「延」の分は呉服屋の値段の中に入れてあるのだ。

同室の患者は従弟制度は農業の借子制度と共通していると語り年季奉公は「辛かった」と言うていたが戦後、封建制度の名残りである従弟制度は労働基準法により禁じられた。

津軽弁 村の笑い話

オガテラ

金九郎どこの娘、啓子さんが、ある夜突然、腹痛をおこしました。

なかなか止りませんので、おばあさんと一緒に村の診療所へいきました。注射を一本打って寝台に寝ていると間もなく痛みもなくなりました。

お医者さんが入ってきて、下腹に聴診器をあて「気持は、どうですか」と聞きました。

啓子さんは「気持」を「毛もち」と聞き違えていたので、恥ずかしくて、顔を真赤に染め、もじもじしていました。

「バッチャ、シャベテモ、イイベガ」と、おばあさんに聞きました。

「シャベロ、シャベロ、医者サマさ、何でもシャベルモソダネ」

啓子さんは、はっきりといました。

「モックラド、オガテラズ」
おばあさんは、あわてて自分の股ぐらに手をやり「コノツ、バカワラシ」と叫びました。

(村)

金木町文化遺産及び遺跡について

一、文化財指定一覧表

青森県指定有形文化財	刀・銘奥観寿藤原吉広一口
青森県指定天然記念物	玉 鹿 石
青森県指定無形文化財	嘉 瀬 奴 踊
金木町指定史跡	金木さなぶり荒馬踊
金木町指定有形文化財建造物	川倉賽野川原地蔵尊
	斜 陽 館

二、遺 跡

遺 跡 名	所 在 地	時 代
1 千苺遺跡	喜良市字千苺	縄文(晩)
2 相野山遺跡	喜良市相野山	旧石器
3 坂本遺跡	喜良市字坂本	平安
4 阿弥陀寺遺跡	喜良市字相野山	平安
5 嘉瀬遺跡	嘉瀬字上端山崎	縄文(前)、平安
6 鎧石遺跡	中柏木字鎧石	縄文(後晩)
7 芦野(1)遺跡	金木字芦野	平安
8 芦野(2)遺跡	金木字芦野	縄文(早前中・後晩)
9 芦野旧競馬場遺跡	金木字芦野	縄文(中)
10 妻の神(1)遺跡	金木字芦野	縄文(前・中・後)

11 妻の神(2)遺跡	金木字芦野	縄文(後)
12 若松地遺跡	金木字芦野	平安
13 さいの河原	川倉字七夕野	平安
14 湯の川遺跡	川倉字七夕野	平安
15 宇田野遺跡	川倉字七夕野	平安
16 川倉小学校遺跡	川倉字七夕野	縄文(中後)、平安
17 雲雀野(2)遺跡	嘉瀬字雲雀野	平安
18 三ノ沢溜池遺跡	中柏木字不動野	縄文(後)
19 芦野運動場遺跡	金木字芦野	縄文(後)、平安
20 藤枝溜池南岸遺跡	金木字芦野	縄文(晩)、平安
21 藤枝遺跡	藤枝字東田	平安
22 神朋町遺跡	金木字芦野	縄文(後)
23 金木遺跡	金木字芦野	縄文(前、後)
24 ヘビ沢遺跡	金木字芦野	縄文(中、後)
25 林下遺跡	川倉字林下	平安
26 岩見町遺跡	喜良市字坂本	縄文(中、晩)
27 大東ヶ丘遺跡	川倉字七夕野	縄文、平安
28 沢部遺跡	金木字沢部	平安
29 坂本(2)遺跡	喜良市字坂本	平安
30 居升村遺跡	金木字沢部	平安
31 金木館遺跡	金木字朝日山	中世

40	39	38	37	36	35	34	33	32
鎧石(4)遺跡	鎧石(3)遺跡	雲雀野(4)遺跡	雲雀野(3)遺跡	嘉瀬(2)遺跡	雲雀野(1)遺跡	鎧石(2)遺跡	萩元遺跡	嘉瀬館遺跡
中柏木字鎧石	中柏木字鎧石	嘉瀬字雲雀野	嘉瀬字雲雀野	嘉瀬字上端山崎	嘉瀬字雲雀野	中柏木字鎧石	嘉瀬字萩元	嘉瀬字萩元
縄文	縄文	平安	縄文	縄文(前)、平安	縄文	縄文、平安	中世	中世

三、神社

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
八幡宮	三柱神社	保食神社	保食神社	保食宮	金比羅宮	不動宮	山神	神明宮	愛石宮	金木八幡宮
村社	村社	村社	無格社	無格社	無格社	別社	無格社	別社	別社	郷社
嘉瀬、萩元	川倉、林下	藤枝、東田	金木山道町	神原	蒔田	金木不動林	金木山道町	金木神明町	金木小川町	金木朝日山一五四
			請中			請中	請中	請中	請中	三五〇戸
二三一	五三	三五	三〇	一八	三〇	三〇	五〇	三二	三〇	

四、寺院

19	18	17	16	15	14	13	12
立野神社	稲荷神社	丹生川上神社	熊野宮	磯崎神社	保食神社	磯崎神社	稲荷神社
村社	無格社	無格社	村社	無格社	無格社	村社	村社
喜良市、柏木	喜良市、野崎	喜良市、千苅	喜良市、千苅	嘉瀬、雲雀野	嘉瀬、端山崎	中柏木、鎧石	嘉瀬、上端山崎
	請中	請中		(俗稿馬頭観音)	請中		
七五	三〇	五〇	九八	一〇〇	五〇	一一	二五

8	7	6	5	4	3	2	1
紫雲庵	明誓庵	喜良市山 小林寺	妙光庵	朝日山照蓮院	青蓮山妙乗寺	金龍山南台寺	金木山雲祥寺
浄土真宗	浄土真宗	曹洞宗	曹洞宗	浄土宗	日蓮宗	浄土真宗	曹洞宗
不明	六〇	八〇	二〇〇	一一〇	二〇〇	二二〇	八〇〇戸
藤枝	嘉瀬雲雀野三二八	喜良市富田六	嘉瀬雲雀野二三一	金木朝日山二五九	金木朝日山四二五	金木朝日山一八三	金木朝日山四三三ノ一

文芸

短歌

春夏秋冬

寄稿 仙場 千寿子
(仙場龍一 詠・故人)

歌碑ありぬこの赤山も幾春秋

風雨に耐えて花の咲きたる

頂にわが家のありて赤山は

岩木の山の秋風も見ゆ

春來れば酔どれ坂の下り道

花の名所も赤山の奥

蛭ホイ時雨蟬ホイ雑魚ホイ

児らの遊び場麓赤山

竹スキー箱櫃ベンジャとりどりに

児らには楽し赤山の坂

風ぐるま

木下 加津恵

夕庭のビール酌み合ふ車座へ

幼孫うたふ七夕の歌

紅空木さゆらく坂道越えゆけば

白衣観音陽に光り在す

香煙と唱文声川倉の

み堂に満ちて今日地藏盆

降霊の娘の口寄せを聴く母か

坐女に摺り寄る眼を赤くして

石塚の坂道に鳴る風ぐるま

絆手ぐるるか薄き母子の

小さき倅せ

白川 哲子

霜月のぼかぼか陽気に布団干し
心満ちたり小さき倅せ

農に生き人と和みて幾十年
代はる世代にとまどひもありて

老ゆわれを娘等は気遣ひ珍ちなる
値の張る品に送れくれたり

何時の間にか田畑つぶされ巨大なる
建物並ぶ街に驚く

祖父母居て我を迎へし古里の土地
人手に渡り墓地にて偲ぶ

我が生活たづき

楠引 八千代

蓮の葉ひまの隙より見ゆる鮎の背は
微動だもせず月に照らさる

嫺やかに柳の小枝乗る川を
時折り跳ねて鮎登りゆく

好きな道あゆめと子には夢たくし
鎌研ぐ夫は還暦迎ふ

稲作に燃ゆ日々ありき我が生活たづき
米余り世へ如何に生きなむ

夏雲のたへて久しき褰月の
海に真向ふ詩碑をめぐりぬ

八十路

岩田 重美

妻や子に語らぬ秘めごとニツツ
抱き八十路の年迎へむとす

幸せの音は聞えず風のなぐる
虎落笛きく夜半に目覚めて

朝な夕な三寒四温を耐へ過ごし
見事に咲きし盆栽の梅

老づきてあきらむること身につきて
腹立つるなく妻の言ふまま

子らはみな水引きしごと離れたる
老いの侘が家も盃蘭盆支度

みどり児

菊地 美絵

梅の花活けて春めく病室に
息の嫁母となる日待ちをり

ずっしりと生きある手応え伝はりて
この世に生れし内孫抱く

爽やかな初夏の風うけみどり児は
花びらのごと笑みて眠りぬ

あどけなき仕草に心洗はれて
みどり児抱けば声上げ笑ふ

あら玉の年を迎ふる祝膳を
ひとつ増やせり小さなる孫に

芦野夢の浮橋

花田 証五郎

幾世代農用水と養鯉池の西岸つなく

芦野夢の浮橋

藩政の人ら掘りたる溜池のさまを変へたり

芦野夢の浮橋

鴨遊びボートの浮かぶ芦野湖に

風情添ふなり芦野夢の浮橋

○さまざまなことに出合ひてさまざまに

身に躲し生き叙勲うけたり

○過ぎし日に真菰を刈りて鮒釣りし

沼は埋められ車道となりぬ

詩

春の夢

小山内 トモ子

今 少し時間をください

春が そこまで きています

何も 支度をしないまま

春が きてしまいます

白鳥たちが シベリアへ

帰ってしまう まえに

福寿草の 咲かない間に

今 少し待って下さい

時間がないのです

恋する支度が なにも

していません

トランクに 恋のキップ

をつめこんで

やがて春が私を連れて行くでしょう

川柳

人生観

白川 哲子

人の真似しても下地が色に出る

いい加減な奴ほど口を出したがる

父老いて子等は遺産を聞きたがる

老若の人生観に距離がある

じっくりと考え運を取り逃す

川倉地藏堂参り

泉谷 てい

亡夫と来たあの日偲んで地藏堂

香煙をまとい心身清くいる

風を入れ水子よろこぶ風車

石佛の一つは母の貌に似て

亡夫の里何故か懐かし地藏堂

領海線

櫛引 八千代

憎しみの一つ奥歯で噛み殺す

言い訳のうまい女の夏帽子

捨て切れぬ男の首を染めに出す

まっさらな心を風は染めたがり

領海線やがてこの子も沖に出る

世の中

岩田重美

安心の裏で不安な核のゴミ

湯気までも旨そう鍋の煮える音

胎動は編棒の端までびびく

世の中はどこかのボタン掛け違い

神棚の隅に貧乏神も棲み

冬 薔薇

高橋 けん一

節くれた指は無口に意地通す

芯のない男風向きばかり見る

にぶいのがとりえ泥舟漕いでいる

草原を持った男の眩しい目

血のいろのままに凍れよ冬薔薇

波 紋

中西昭治

だまされてみようか夫の下手な嘘

もう一度逢いたい人と指を切り

毒舌を吐いて波紋の中に居る

この人とあわねば今があるだろうか

根廻しの効果じっくり見届ける